だるま

中島八十一

朝ドラ「ブギウギ」の主人公の實家、錢湯營む義父母（柳葉敏郎、水川あさみ）の日々拜む佛壇の脇に達磨の繪見えたり。實に同じ繪の我が枕元に額裝し居り。達磨の圓き腹に縱を二倍に伸ばせる「氣」の字、丸く書きし「心」の字、横倒しにせる「腹」の字、大なる「人」の字、目立ちて小なる「吾」の餘す所なく詰められ、両脇に石上三年、面壁九年とぞ見ゆる。版元示す印は起上達磨堂と判讀せらる。余十年近く枕元に見續けたるもののその意を知らず、版元も知らずブギウギ放送に至れり。

版元いづくにありや。ことのほか探索手間取りし。「達磨堂」はヒットせず、「だるま寺」には全國各所にヒットする寺あり、いづれこの繪の版元なりや分明ならず。京都に行くついでを得て京都の達磨寺を訪ふことにし、一覧より法輪寺を選びたるに法輪寺もまた京都市内に三箇所あり。その中より達磨をウリにせる寺選び訪ひき。境内拜觀料不要にて、蒐集したる達磨を詰めたる堂のみ有料なり。入口脇の賣店に件の達磨圖のファイル見つけ、この寺なりと一件落著。賣り子の嫗（おうな）に文字の表すところも敎はれり。気は長く、心は丸く腹を立てず、他人は大きく吾は小さくと讀むものなり。朝ドラに話を振れば「さうやってなぁ、ちいとも氣付かせなんだけどお客さんが敎へてくれよってなぁ」と特段の感慨あらぬけしき。達磨詰めたる堂は入口より首差し入るるのみにて達磨堂探索は以上にて終はりぬ。

そもだるまとは何ぞや。石上三年と言へばかつてサラ川に「石の上三年經てば別の石」、米國三年滯在の後ブラジル異動の辭令受け讀みたる句の堂々一等賞取りたること思ひ出す。面壁九年、片手切り落して差し出ださずんば入門なるまじきところに余は夢にも出向くまじ。その片手日本に将来し河童の手にたりや。七轉び八起きとは何ぞや。一回轉びて一回起き、七度轉びてまた起きたれば七起きならずや。余この公案に挑むこと五十年。だるまはデフォルトにて横たはりたり。そこより起くればまづ一起。なほ轉べば一轉一起。今一度起くれば一轉二起。かくして七転び八起きは成り立つ。そこに至るに五十年。面壁九年なぞは束の間の歳月なり。さりとて達磨の良きところは理並べ立てぬことにあり。何十年も昔歐洲の人時に余に向かひてVous avez parfaitement un raison. Mais,（汝に理有り、しかし）と言ひたり。かの國の人も、理詰めのみにては立ち行かずと思ふ束の間やあらむ。

（令和六年九月十九日受附）